

タイトル「透明人間」

作者名 藤木 健

【あらすじ】

奈美に親友の瞳から電話が来た。奈美が中学時代、好きだった龍崎と一緒にいると言う。奈美は今日こそ思いを伝えたいと思い、待ち合わせ場所に向かい、三人はランチをする。だが、瞳と龍崎が奈美がまるで見えていないかの様に二人で話し始める。奈美は悲しくなり涙を流すと、見知らぬ男に声を掛けられる。

【特記事項】

どんでん返しがあると分かってても絶対に見破れない斬新なラストに注目してください。もう一度、見たくなる様な物語にしました。

【枚数】 13枚

【文字数】 3717文字

【登場人物表】

緒方 奈美（26）……主人公

金井 瞳（26）……奈美の子友

龍崎 昂（26）……奈美の子きだつた人

小林 直樹（26）……龍崎の子友

○奈美の自宅。

緒方奈美（26）が机に突っ伏して眠っている。

机に置いてある奈美のスマホが突然バイブする。5回目の着信で気怠そうな顔してスマホに出る。

中学の同級生、金井瞳（26）からである。

奈美「（寝ぼけながら）もしもし……」

瞳の声「あっ、奈美？　もしかして寝てた？」

奈美「（だるそうな声で）そうだけど……映画一緒に観に行くのは来週の土曜じゃなかったっけ？」

瞳の声「分かってるわよ。そんな事より、今から出てこれない？」

奈美「（アクビしながら）いいけど……あと二時間後にしてくれない？」

瞳の声「いいの？　龍崎君も一緒なんだけど」

奈美「龍崎って、誰よ……？」

瞳の声「忘れちゃったの？　中学のクラスメ

イトだった、あの龍崎君」

奈美「（ハッとなり）えっ！？」

奈美、一気に目が覚める。

瞳の声「さっき偶然、駅前で龍崎君と会ってさ。久々だから盛り上がっちゃって、ランチでも行こうか？って流れになったのよ。ほら、奈美もかっこいいって言ってたじゃない！ 覚えてるでしょ？」

奈美M「（固まり）……えっ、あの龍崎君なの！？ やばい……あまりの衝撃で瞳の聲が全く耳に入らない……」

瞳の声「……かな？って思っ……ちよつと、奈美聞ってる？」

奈美「（我に返り）あっ、ごめんごめん」

瞳の声「奈美は彼氏いないんだし、どうせ暇してると思っ……別に嫌なら、またにするけど」

奈美「（焦った形相で）い、行きます！ 行きます！ 今すぐ出ます！」

瞳の声「でも二時間後なんでしょ？」

奈美「ご、5分、いや、10分だけ待って！」
瞳の声「分かったわよ。なんとか繋いでおくから。じゃあね」

奈美「中学の頃から、ずっと大好きだった龍崎君……あの頃は恥ずかしくて、会話もろくに出来なかったけど、今日は逃げずに、ちゃんと向き合いたい！」

奈美、意を決した顔で自宅を出て行く。

○駅前。

小柄でオシャレな出で立ちの瞳と長身でイケメンの龍崎が駅のロータリーで話をしている。

そこへ正面から奈美が走って現れる。

奈美「お待たせ！」

瞳「（奈美に気付き）遅いよ！」

龍崎「奈美ちゃん、お久しぶり！」

奈美、龍崎と目が合う。

奈美「（龍崎を見て）お、お久しぶりです」

奈美、恥ずかしくて目を逸らす。

奈美M「やばい……超かつこいい！でも恥ずかしくて目が合わせられない……」

奈美、照れてしまい、思わず下を向いてしまう。

龍崎「じゃあ、立ち話もなんですから、喫茶店でも行きますか？」

瞳・奈美「はい」

三人は喫茶店へ歩き出す。

○喫茶店。

龍崎と瞳が正面に座っている。

龍崎の斜め前には奈美が座っている。

瞳「うちら何年ぶりの再会だろう？」

龍崎「中学卒業以来だから10年ぶりかな」

瞳「でも地元に住んでて、なんで今まで会えなかったんだろうね？」

龍崎「俺、大学卒業してから、ずっと海外勤務だったから。地元に戻ってきたの久しぶりなんだよ」

奈美、うつとりした顔で龍崎を見て、

奈美M「素敵！ 英語ペラペラなんだあ！」

瞳「じゃあ、たまたま地元に戻って来た日に偶然再会したんだね！ なんか運命を感じちゃうな！」

龍崎「そうかもね！（と笑う）」

ちよつとムスツとした顔になる、奈美。

瞳「ところで龍崎君って、彼女いるの？」

龍崎「一昨年の夏に別れてから、いないよ」

瞳「意外！ ひっきりなしに彼女いそうないメージだけど」

龍崎「そんな事ないよ。逆に彼女がいるのかと思われて、誰も言い寄ってこないんだよ
ね（と笑う）」

瞳「分かる！ それはイケメンならではの悩み
ね！（笑う）」

龍崎「って言うか、イケメンじゃないし（と笑う）」

奈美M「（龍崎を見て）謙遜してる所も素敵！」

龍崎「（瞳と奈美を見て）二人は彼氏いる

の？」

瞳「いたら、今頃彼氏と遊んでるわよね？」

（と奈美を見る）」

奈美「ええ……（苦笑いを浮かべる）」

龍崎「（奈美を見て）では奈美さんは、好きな人とかいるの？」

奈美「（驚いた顔で）えっ!？」

龍崎が微笑みながら、奈美を見つめている。奈美と龍崎、目が合う。

奈美「（動揺して）わ、私は……」

奈美M「龍崎君の事が好きです……なんて

口が裂けても絶対に言えない！」

龍崎「（奈美を見つめて）ん……？」

奈美「いえ、特にいません……（目を逸らす）」

龍崎「そうなんだ……」

奈美M「やっぱり本人が目の前に座っている

と、まともに話せない……頑張れ、私！」

瞳、二人の会話に割って入るかの様に、

瞳「ねえねえ、私にも同じ質問してよ！」

龍崎「（視線を瞳に移し）じゃあ、瞳さんは好きな人いるの？」

瞳「好きな人はいないけど、好きになりそうな人ならいるよ！（と微笑む）」

奈美「（瞳を見て）！？」

龍崎「その人はどういう感じの人？」

瞳「気になる？（と微笑む）」

龍崎「うん（と笑う）」

瞳「私の好きな人はね、背が高くて、イケメンで、語学力があって優しい人かな」

龍崎「（驚いた顔をして瞳を見て）！？」

奈美、横目で不快な顔して瞳を見る。

奈美M「それって、そのまんま龍崎君の事じゃない！」

瞳「じゃあ、龍崎君はこういうタイプの女性が好きなの？」

龍崎「小柄でオシャレで、明るい子が好きだなー」

奈美M「（龍崎を見て）それって、もろに瞳の事じゃん！ この二人、間接的に告白し

てる……」

瞳「私ね、好きな人が現れると、その人が眩しすぎちゃって、彼以外の人間が一切見えなくなるの」

瞳の目には龍崎が輝いて見え、その周りの景色が暗く見えている。

奈美M「（瞳を横目で見て）今、まさにその状態だわ……」

龍崎「実は俺も……（と微笑む）」

奈美M「（呆れた顔で）あんたもかい……」

龍崎の目にも、瞳が輝いて見えており、横に座っている奈美の姿が視界から消えている。

瞳「龍崎君って趣味とかあるの？」

龍崎「趣味とかじゃないけど、海外の生活が長かったから、久々にデイズニーランドに行ってみたいんだよね」

瞳「私、デイズニーランドの年間パスポート、持っていました！ 良かったら一緒に行きませんか？ 案内しますよ！（と笑う）」

龍崎「有難う！是非お供させて下さい！」

瞳と龍崎、完全に二人だけの世界に入っ
てしまい、気付くと奈美には見向きもし
なくなっている。

奈美M「瞳……私はただの引き立て役なの

……？」

奈美に構わず会話を続ける二人。

瞳「乗り物は何が好き？」

龍崎「スペースマウンテンかな？」

奈美M「（横目で二人を見ながら）ねえ、二
人共、私の事忘れてない？私はここにいる
よ……」

奈美、小さく龍崎に手を振ってみる。

だが、龍崎は瞳との会話に夢中で、全
くそれに気付かない。

奈美M「もしかして、私の事が見えないの
……？」

龍崎と瞳、奈美の存在を忘れてるかの
様に談笑している。

奈美M「これじゃあ私、透明人間じゃない

！」

奈美、二人のやり取りを聞いて悲しくなり、自然と涙が溢れて来る。

と、突然何者かの声が聞こえてくる。

男の声「どうかしました？」

奈美、聞き覚えのない声に反応して顔を上げる。

すると奈美の正面に見知らぬ男が座っているのに気付く。

龍崎の友人、小林直樹（26）である。

奈美M「（直樹を見て）誰……！？」

奈美、ふと今日一日の出来事を振り返る。

（テープがキュルキュルと巻き戻り、最初の奈美の自宅のシーンへ戻る）

○奈美の自宅（奈美の回想）

奈美と瞳がスマホで話している。

瞳の声「さっき偶然、駅前で龍崎君と会った。久々だから盛り上がっちゃって、ラン

チでも行こうか？って流れになったのよ。

ほら、奈美もかっこいいって言ってたじゃない！！ 覚えてるでしょ？」

奈美M「（固まり）……えっ、あの龍崎君なの！？ やばい……あまりの衝撃で瞳の声
が全く耳に入らない……」

瞳の声「あと龍崎君のお友達の直樹君って人も一緒なんだけど。おとなし目だけど奈美に合うかな？って思ってた……ちよつと、奈美聞ってる？」

奈美「（我に返り）あっ、ごめんごめん」

○駅前（奈美の回想）

駅前にいる、瞳と龍崎の元に奈美が駆け寄って来る。

奈美「お待たせ！」

瞳「（奈美に気付き）遅いよ！」

龍崎「奈美ちゃん、お久しぶり！」

奈美、龍崎と目が合う。

奈美「（龍崎を見て）お、お久しぶりです」

奈美、恥ずかしくて目を逸らす。

奈美M「やばい……超かっこいい！ でも
恥ずかしくて目が合わせられない……」

奈美、照れてしまい、思わず下を向いてしまう。

奈美に直樹が近寄り、

直樹「（小声で）はじめまして、小林直樹です」

でも、奈美は下を向いていたので、それに全く気付いていない。

○喫茶店（奈美の回想）

四人でお茶をしている。

奈美の正面にシャイな面立ちの直樹が座っているが、奈美の目には龍崎の姿が輝いて見えており、正面に座っている直樹の姿は暗転し存在に気付いていない。

× × ×

（喫茶店・現在に戻る）

奈美M「（ハツとなり）彼、ずっと側にいてくれたんだ。ずっと私の事、見てくれてたんだ……なのに私は龍崎君に夢中になり過ぎて、彼の姿が見えてなかった……（申し訳なさそうな顔をして直樹の顔を見つめる）」

奈美の頬に一筋の涙が通る。

直樹、それを見て奈美にハンカチを差し出す。

直樹「何か悲しい事でもありましたか？（と、優しく微笑む）」

奈美「ううん、もう大丈夫。ありがとう（ハンカチを受け取り涙を拭う）」

奈美の目に龍崎の姿が暗転し視界から消え、直樹の姿が光り輝いて見えだす。

奈美M「（直樹を見て）透明人間みつけた（と微笑む）」

（了）